

昔むかし、あるところに、トロットリーナというまずしい女の子がいました。トロットリーナは、お母さんとふたりきりで暮らしていました。

あるとき、お母さんが病気で寝こんでしまいました。食べる物がなくなったので、トロットリーナは、食べ物をもらいに町のお祭りに出かけていきました。木ぐつがこわれたので、はだしで歩いていきました。

とちゅうで、一軒の小屋の側を通ると、小屋の中から、

「どこへ行くんだい、トロットリーナ」と、声がしました。

「お祭りに行くの。病気のお母さんのためにパンをもらいに行くの」

しばらくして、トロットリーナは、お祭りでもらったパンのかけらと少しのケーキをかごに入れてもどつてきました。小屋の側まで来ると、またあの声がしました。

「パンとケーキはおれに持ってきてくれたのかね、トロットリーナ」

「ちがうわ。病気のお母さんあげるの」

「どの道を行くんだい」

「石ころ道。わたしはくつをはいていないから、とげの道はちくちくするんだもの」

「そいつは、けっこう」

トロットリーナが行ってしまおうと、小屋の中からおおかみが出てきました。おおかみは、とげの道をびよんぴよんかけていって、先回りして、トロットリーナの家をたたきました。お母さんが、

「だれだい」とたずねました。おおかみが、

「わたしよ。トロットリーナよ」というと、お母さんは、

「じゃあ、起きようかね」といって、戸を開けました。おおかみは家の中に飛びこむと、お母さんをつかまえて、大きな口の中にぽーんと放りこんでしまいました。そして、お母さんのショールをはおり、お母さんのめがねをかけて、お母さんのベッドに入り、ふとんをかぶってねていました。

やがて、トロットリーナが帰ってきました。トロットリーナは、

「お母さん、パンとケーキをもらってきたわ」といいましたが、すぐに、ベッドでねているのがおおかみだと分かりました。

「お母さんは、こんなに来たなくはなかったわ。どうしてお母さんのめがねをかけているの」

「おまえをもつとよく見るためだよ」

「どうしてお母さんのショールをかけているの」

「寒いからだよ」

おおかみはとび起きて、トロットリーナをつかまえました。

「ベッドにおいで、おまえを食べてやる」

「行かない。おしっこが出そうなの。下へ行つてしてくる」

「だめだ。ここでするんだ」

「いやよ。ここじゃできない」

そこで、おおかみは、トロットリーナをかごに入れて、つなで地下室に下ろしました。トロットリーナは、かごから出ると、小さなるばを自分の代わりにかごに乗せました。

しばらくすると、おおかみが、

「まだかい。トロットリーナ」とききました。

「いいわ。引きあげてちょうだい」

「おや、なんて重いんだろう。何を食べたんだね」

るばを乗せたかごは上がっていきました。トロットリーナは、大急ぎで外へ出ると、畑にむかって逃げだしました。そのとき、おおかみがまどから顔を出していいました。

「トロットリーナ、トロットリーナ、

三時におまえをつかまえる」

「おおかみ、おおかみ、そうはいかない」

畑では、トロットリーナのおばさんが仕事をしていました。

「ああ、おばさん。おおかみが来て、お母さんを食べてしまったの。わたしをかくしてちょうだい」

そういつて、トロットリーナは、おばさんの大きなスカートの中にすっぽりかくれました。

そこへ、おおかみが来て、

「トロットリーナを見なかったかい」と、おばさんにたずねました。おばさんは、答えました。

「ああ見たよ。あつちのがけの上に、お母さんをさがしに行ったよ」

おおかみは、走っていつてがけの上からのぞきこみました。そのとき、おばさんが、おおかみをぼーんとつき落としました。トロットリーナは、おばさんのスカートから出てくると、石をひろつておおかみの上に投げました。おおかみは死んでしまいましたとき。

上を向いて、下を向いてごらん

わたしのおはなしは、これでおしまい。